

開催地名：富山県砺波市	
開催日時	令和元年 11 月 8 日（金） 19:00 ～ 20:30
開催場所	砺波市役所
語り部	大内 幸子 （宮城県仙台市）
参加者	砺波市防災士連絡協議会、自主防災組織等 約 80 名
開催経緯	<p>当市には、今後 30 年以内に地震が発生する確率が最も高いとされる「Sランク」に位置づけられる「砺波平野断層帯東部（高清水断層）」が市内を縦走しており、さらに、平成 29 年 12 月に富山県が発表した地震被害想定において、石川県の中央部を走る「邑知潟断層帯」の調査結果では、市内で初めて震度 7 の地震が発生する可能性が示されるなど、地震による被害が危惧される。また、昨年 9 月の台風 21 号では、市内で初めて、土砂災害の発生危険がある地区を対象に避難情報（避難準備・高齢者等避難開始）を発令し、避難所を開設したが、行政、自主防災組織及び住民等ともに初めての経験で多くの課題も残った。災害経験の少ない本市において、今後起こりうる各種災害への対応について、実例を踏まえた訓練の実施などは困難な状況にある。</p>
内容	<p>（１）震災当日</p> <p>2011 年 3 月 11 日 2 時 46 分に地震が発生した。震度 6 強だったが、防災訓練で震度 7 の起震車に乗ったときよりも激しい揺れに感じた。「もう私たちはこのまま、おそらく日本全体が沈没してしまうのではないか」、「私たちの命はなくなるだろう」と思いながら、この 5 分間を耐えていた。日頃から訓練をしていた私たちは、まず重要支援者の安否確認に走り、それから被害状況の確認、避難誘導を実施した。私は高砂小学校という指定避難所に駆けつけ、暗くなる前に、炊き出しの準備や災害対策本部の立ち上げを行った。</p> <p>仙台駅の構内も、地震で被害が発生し、帰宅困難者が全部締め出されていた。そのため、仙台駅の近くの小学校等は、その帰宅困難者であふれてしまい、地域の人たちが避難することになっている避難所から、地域の人たちが押し出されてしまった。</p> <p>（２）震災で感じたこと</p> <p>私の住む福住町では平成 15 年から自主防災組織を立ち上げ、重要支援者の名簿作成や他市町村との災害時相互協力協定の締結などを進めてきた。今回それが役立ったが、課題や気付いた点も多い。まず、重要支援者の名簿やマニュアルを取り出せなかった。家屋が崩壊し、立ち入れなかったからである。名簿が頭に入っていたので安否確認ができた。また、指定避難所は人が殺到して、立ち上げが遅れた。避難所の高砂小学校には 500 名分の準備しかなかったが、そこへ 1,500</p>

～1,600名が来た。市役所には、帰宅困難者である2,000名以上の避難者が殺到した。ライフラインは止まり、電話・メールなどの通信も途絶えた。災害時に水が出る公園を知っていたので水汲みに行き、炊き出しを行った。最も困ったのはトイレである。小学校のプールに水汲みに行き、トイレを流した。公園に手掘りのトイレも作った。震災の関連死にはトイレに関したものが多い。外のトイレは寒いし、中のトイレは機能していないので我慢して水分を摂らない人がいる。そうすると体調を崩す。トイレ対策は事前に考慮しておくべきである。

とてもありがたかったことは、3日分備蓄していた食料が大体底をついてきて、これはもう足りなくなってしまうだろうというときに、災害時相互協力協定を結んでいた山形県の尾花沢市や長野市等、いろいろなところから直接私たちの町、福住町にトラックで支援物資が続々と届いたことである。

また、災害時には女性の視点にたった配慮が必要だと強く感じた。これは阪神淡路大震災のときにも言われていたが、避難してくる住民の8割が、いわゆる災害弱者と言われる高齢者、障害者、妊婦、子どもたちという事実から、男性だけで運営するよりも女性のリーダーがいることで、より細かいところまで行き届いた対応が可能となる。この点は現在仙台市でもとても見直されていて、避難所運営委員会に女性が参画し、参画するだけではなく、委員会をリードしていくようなスタイルにどんどん変わってきている。

(3) 教訓として

日常の取り組みと訓練が災害時に力を発揮するということを強く思った。重要支援者の住民の名簿作成を行っていたこと、全員参加型の防災訓練を行っていたこと、それから災害時相互協力協定を結んでいたこと、これらが全て大いに役に立った。



開催地より

実際に災害時に支援活動を行った方から直接災害当時の状況を講演して頂き、大変貴重な体験だった。顔の見える関係が減災につながるというご意見に共感した。